

浄土

1987-12

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (輸送省 特別投承認雜誌) 第三二五号
昭和六十二年十一月二十五日印刷 昭和六十二年十二月一日発行
第五十三卷 十二月号





十二月の秀句

北風や合掌棹して沼渡舟

橋本 鶏二

冬服におのが矜持をたもちつつ

星野 立子

片づけて吾が身となりし年を守る

翁長日ねもす

十二月号



其の国の衆生、常に清旦を以て、お
のおの衣袂をもって、諸の妙華を盛
りて、他方十万億の仏を供養す。

——『阿弥陀経』

目次

エッセイ

- 花盗人……………二本松 嘉 瑞……(2)
- 良寛雑記(二)……………江 目 達 雄……(6)

=江戸物語=(11)

- 江戸の盗賊……………細 田 隆 善……(13)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <9>

海と山の狭間で

——九月十三日は無事過ぎたが——

……木 下 隆 一 ……(28)

《四行詩》

- 南天の実……………清 川 宗 治……(27)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第42回

親縁の駅路

……………寺 内 大 吉……(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「さざんか」 松浦春子画

花盗人

花なんか嫌いだ、という人は世界中、何処を捜しても居ないだろうと思っていたら、花んて嫌いだというお婆さんがいたのには驚かされた。

散歩の途中、道端に草花の鉢を並べてある一軒の家の前で一人のお婆さんがせっかく美麗に咲いている花を一つ一つ摘み取っている。しかも、摘み取った花を無造作にごみ取りの中に投げ込んでいたのである。

二本松 嘉瑞 にほんまつ かずい

(元映画監督)

「この花、どうかしたんですか？」
不思議に思った私の問いに、お婆さんは振り向きもせず、黙々と花摘み作業の手を休めようともしません。

「毒でもあるんですか、この花に」
「わたしゃね、花がきれいなんだよ、だから、咲いたらとっちまうんだよ」
私はこの花の色、また形でも気に入らないのか



と思つて、

「あの一、お婆ちゃんの好きな花ってどんな花なんですか？」

「花はみんなきらいなのさ」

「そんなら、なぜ、花の鉢植えなど置いておくんですか」と私は不思議に思い更に尋ねようかとしたが思いとどまった。というのは、このお婆さんには花に纏わる何かいやな思い出でもあるのか、たとえあったとしてもそれを此処で聞きただすのも変なものだと、ととっさに考えたからでした。

私はしばらく、不思議なお婆さんの花摘み作業を見ていた。

「花は散るからいやなのさ、だから、散る前にわたしが摘みとってやるんだよ、咲いたら散らなきゃいいんだよ」

お婆さんはぽつぽつと独りごとのように言い出した。

「えっ？」

なんだか分かるような、分かんないような、複

雑な気持ちで私はその場を立ち去ったのですが、散歩の間じゅう、お婆さんのことが胸につかえていた。

帰り道、同じ道を通つてみた。お婆さんの姿はなかったが、きれいに花を摘み取られた鉢が数鉢、水をやったらしく濡れていた。棚の上にきちんとならべられている。育てるには育てるらしい様子である。

お婆さんは花自身を憎んで、嫌いと言っているのではない。むしろ愛している。愛しているあまり、その可憐な花が自から散っていく姿を見るのに忍びない。だから、自から散り行く憐れな姿を人前に晒す前に摘み取ってやる。これがこのお婆さんの花への有り余る愛情の発露なのであろうかと、私は家の庭の片隅、今が盛りのキキョウの花を見ながら考えました。

私の家の近くに収玄寺というお寺があります。そのお寺の住職夫妻はそろって花好きで境内一杯

に所狭しと色々な花草木を植え、四季折り折りに道行く人々の目を楽しませています。

ある日、お寺の門柱の横に真新しい木札が付けられていました。

《境内にはいろいろな花草木があります。手折ったり、抜き取ったりしないしないで、大切にしてください》

住職の話によると、「人が大勢こられる時は目が離せないんですよ。折角、咲いた花を無造作に摘み取り、匂いをかぐと、これ又、気にいらないのか、ポイとその場に捨てていくんですからね。こんな木札出したかないですがね」ということであつた。

この木札、住職の話、見聞するほどになんともやるせない気持ちにかりたてられます。

花には匂いだけでなく、姿だってあるんです。匂いをかぎたければ、自分の鼻を花に近ずければいいでしょう。ポイとその場に捨てて行く、この無神経さにはただ驚くばかりです。

「ほんとうに、そんなことってあるんですか

？」

「あるんですね。本来なら出したくない木札でも出さざるを得ないんです」

花一輪手折るならまだしも、根から抜き取るとは言語道断、許し難き泥棒、盗人です。

古い狂言に『花盗人』という狂言があるのを思い出します。

詳しく正確な筋立ては記憶にありませんが、大体、次の様だったと思います。

ある人が桜の花の美しさに心を奪われ、屋敷内に入り桜の花枝を盗ろうとして、家主に見つかり、捕まってしまう。その人は桜の花の美しさを愛でる和歌を作り、家主に差し出す。家主は花盗人であるその男の花を愛でる心情に打たれ、許してやるばかりか、花の下で酒を酌み交す。

盗人、許し難き盗人の中でも、花盗人には、振り返って見ると何か共感出来るものがある。そうした人情の機微を描いたものだと思います。共感できるもの、それはやはり、花への愛情だったのでしょう。

初記のお婆さんの花摘みもこの花盗人も、いい、わるい、は別として何か共通したもののある感が残ります。しかし、お寺さんの話の方はどうしても、やるせない、許し難いものを感じます。

野草は山野の中にあつてこそ野草、その美しさを愛でたければ、その地にゆけばいい。それを根ごと取って来て、鉢植えにしたのでは野草ではなく、園芸です。野草の美も半減されるでしょう。わかつてはいるが無反省に押え難きものがあるようです。

五月書房選書

大正大学学長・文学博士
全日本煎茶道連盟理事
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

■体裁

四六判／上製／口絵二頁

定価一、六〇〇円（〒二五〇円）

五 月 書 店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五

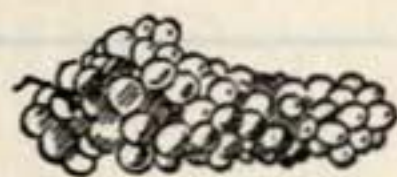
電話 〇三―二三三―四一六一

振替 東京九―三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇―一四六三

良寛雜記 (二)



江 目 達 雄
ごう のめ たつ ゆう

(山形市迎接寺住職)

越後の弥彦山に連らなる国上山くがみの中腹に、和銅二年(七〇九)の開基と伝えられる真言宗の古刹・国上寺こくじょうじがある。

この国上寺から、西に二百メートル余り山道を下ると、百坪ほどの台地となっていて、老杉の間に茶室風の建物が見えてくる。良寛が、文化元年(一八〇三)のころから十数年間をすごした五合庵である。

去年の十一月初旬、私は、はじめてこの五合庵を訪ねることができた。まわりの広葉樹には、まだ紅葉が残っていたが、地表は落葉に覆われていた。

焚くほどは 風がもてくる落葉かな
の句碑と、

あすからはわかなつまむとおもひしに

きのふもけふもゆきはふりけり

の歌碑が立っている。

五合庵は、もともとは国上寺の草庵であつた。貞享年間のころ、国上寺復興に尽力した万広という客僧のために、この草庵を整え、日に五合の米を給した。このことから五合庵と呼ばれるようになったと伝えられている。

良寛は、寛政八年（一七九六）、三十九歳のとき、十数年ぶりに故郷の土を踏んだ。しかし、出雲崎の生家には立寄ることもなく、郷本の海辺にわらじをぬいだといわれている。これより五合庵に落着くまでの数年間は、中山の草庵、ここ国上山の五合庵、本覚院、寺泊の密蔵院、野積の西方寺などを転々とした。

五合庵には、国上寺住職の義苗が隠棲していたが、文化二年にここで示寂し、五合庵は空庵となつたので、良寛がここに定住するようになった。以来、五十九歳のころ国上山の山麓に近い乙子神社おとこじの草庵に移るまでの十数年間を、ここに住んだ。

しかし、今の五合庵は当時のものではなく、大正三年の再建である。かや葺き屋根、間口二間、奥行一間半。老杉の間の何の造作もない素朴な建物。再建ではあるがその素朴さがまわりの環境と相まって、草庵のわびしさを偲ばせてくれる（表紙裏写真参照）。

良寛に「五合庵」という詩がある。自然の中に埋没した、清貧へのもののくらしをうたっている。

索々たり五合庵、実に懸磬^{けんけい}の然るが如し。戸外には杉千株^{しゆ}。壁上には偈教篇。釜中時に塵あり、甌裏^{そうり}更に烟なし。唯東村の叟りて、頻に叩く月下の門。

(柳田聖山訳「良寛道人遺稿」による)

良寛は五合庵にあって、多くの文人墨客と交遊し、里に下っては乞食^{こつじき}し、子供らと遊び、村人たちと語らった。五合庵を訪れた人々として、原田鵲齋、大村光枝、亀田鵬齋、鈴木文台、阿部定珍、解良栄重たち、それに生家をついだ実弟山本由之などがおった。

良寛は、文化十三、四年の頃、乙子神社の草庵に移った。

神社の左手の木立ちに囲まれて、杉皮葺の粗末な草庵がいまもある。これも良寛の当時のものではない。明治十八年に神社の拝殿が建築されたさい、その残材で再建されたものということである。

拝殿のすぐ右手に、良寛の詩歌碑があって、漢詩一篇と施頭歌一首が刻されている。その詩は、五十代半ばの五合庵での作とみられており、良寛本来の面目を、格調高くうたった代表的な詩として名高い。

生涯懶立身 生涯 身を立てるに懶く、

騰々任天真 騰々 天真に任す。

囊中三升米 囊中に 三升の米、

炉辺一束薪 炉辺に 一束の薪、

誰問迷悟跡　たれか問わん　迷悟の跡、
何知名利塵　なんぞ知らん　名利の塵。

夜雨草庵裡　夜雨、草庵のうち、
双脚等閒伸　双脚　等閒に伸ぶ。

（東郷豊治「良寛詩集」による）

俗世の名利はもとよりのこと、迷いだ悟りだということも捨て去り、自然のままに任せきった、何の屈託もない自在の心境。良寛の到達した悟道の境地が、この一篇の詩に凝縮されているようである。

○

ことしの七月、島崎の隆泉寺に良寛の墓を詣うでた。JR越後線小島谷^{おじまや}駅から、暑い日ざかりの道を十分余り歩いて、良寛終焉の地木村家の門前に着く。そこは現在は良寛維宝堂として、良寛の遺墨遺品などが公開されているが、その日はあいにく休館日にあたっていた。くぐりから母屋の裏手にまわり案内を乞うと、老夫人が快く玄関を開いてくれた。

良寛は、文政九年（一八二六）六十九歳のとき、国上山を下ってここ和島村島崎の能登屋木村元右衛門宅に身を寄せた。老境を心配した木村元右衛門のすすめに従ったのであった。

その庵里は、母屋の裏手で土蔵の隣の木小屋を改造したもので、八畳二間に炊事場、便所などもついていたという。その建物は、明治維新のさい兵火で焼失してしまい、いまはその跡地に安田靱彦画

伯の揮毫になる「良寛禅庵室跡」の碑が建っている。

良寛はこの庵室に移ったとき、阿部定珍にあてて、こんな手紙を書いた。

如仰此冬は島崎のとやのうらに住居仕候。信にせま^{まこと}くて暮し難候。暖氣に成候はば又何方へもまいるべく候。(以下略)

「信にせま^{まこと}く」とは、庵室のことではなく、まわりの環境が五合庵などの、のうのうとしたところに較べ、いかにも狭苦しいことを言ったのであろう。しかしここが良寛の終焉の地となった。

良寛はここで、若くして美しい貞心尼という尼僧の訪れをうけた。

貞心尼は、寛政十年(一七九八)に越後長岡藩士の娘として生れた。若くして関長温という医師に嫁いたが、五年後夫に死別し、柏崎の洞雲寺に入って出家、のち長岡の近傍福島の間魔堂に住んだ。

貞心尼がはじめて良寛を訪ねたのは、文政九年(一八二六)二十九歳のときとみられており、とすれば良寛は六十九歳であった。

貞心尼は良寛のなくなった四年後に、「蓮^{はちす}の露」という一帖の書物をまとめ、良寛のこと、そして良寛と唱和した歌などを収めた。

そこには、短歌をとおしてこまやかな情愛が語り合われており、人間良寛の温味がほのかに伝わってくるようである。貞心尼とのめぐりあいは、晩年の良寛を美しく彩る出来事であった。

文政十三年(一八三〇)の夏ごろから、良寛は健康を害した。天保と改元されたその年の十一月頃か

ら、激しい下痢に悩み、年の暮には危篤状態に陥った。大雪をふんで弟の由之や貞心尼、法弟の遍澄などがかけつけてきた。

あけて天保二年正月六日、午後四時をすこしまわったころ、由之、貞心尼、遍澄、木村家の人々のみまもるなか、七十四歳の生涯を終えた。

良寛の遺骸は、浄土真宗隆泉寺の木村家の墓地に埋蔵された。

○

木村家から隆泉寺までは、歩いてほんの二、三分の距離であった。

山門をくぐると左手に経蔵がある。能登屋木村元右衛門が、黄檗版一切経六千七百余巻を収めて寄進したもので、良寛が大蔵経記を書いた。その筆跡は、経蔵の前の石碑に復刻されている。その傍に、行脚婆の良寛のブロンズ像が立っている。

良寛の墓は、本堂の左手をまわったやや小高いところにあった。墓域はかなり広く、その中央に「良寛禅師墓」と刻まれた大きな墓碑である。碑の正面の左右に、良寛の詩「僧伽」と施頭歌一首が刻されているが、風化して判読しにくくなっている。いずれも良寛の弟由之の孫にあたる山本（橋）泰世の書である。

良寛の墓の左に、弟由之の「由之宗匠之墓」があり、右側の隅寄りにある二基の墓碑が、木村家の墳墓であった。控目なこじんまりしたものであるが、うち一基の墓碑の文字は、正面の六字のお名号をはじめ、すべてが良寛の筆であった。

（了）

昭和63年度版

浄土宝暦

発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
年末年始の好便な檀信徒用施本として、広くおすすめいた
します。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ブ以上 特価60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

……お申込み……

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会

(振替) 東京 8-82187



江戸物語

(11)

江戸の盗賊

細田隆善

(俳号・豊明)

盗賊の代表といわれた石川五右衛門が文禄三年（一五九四）豊臣秀吉の命によって、京都三条河原において釜煮の刑に処せられた。油を張った大釜を煮えたぎらせて煮殺す極刑であった。このとき関係者二十余名も処刑されたというが、五右衛門の一子、一郎も一緒に煮られたが、五右衛門は最後まで一郎を高く捧げながら死んだという。このときの巷説に、

石川や浜の真砂はつくるとも

江戸は全国総城下町
江戸は世界一の人口
江戸は日本の縮図
江戸で日本の富の半ばが消費
江戸文化の出現

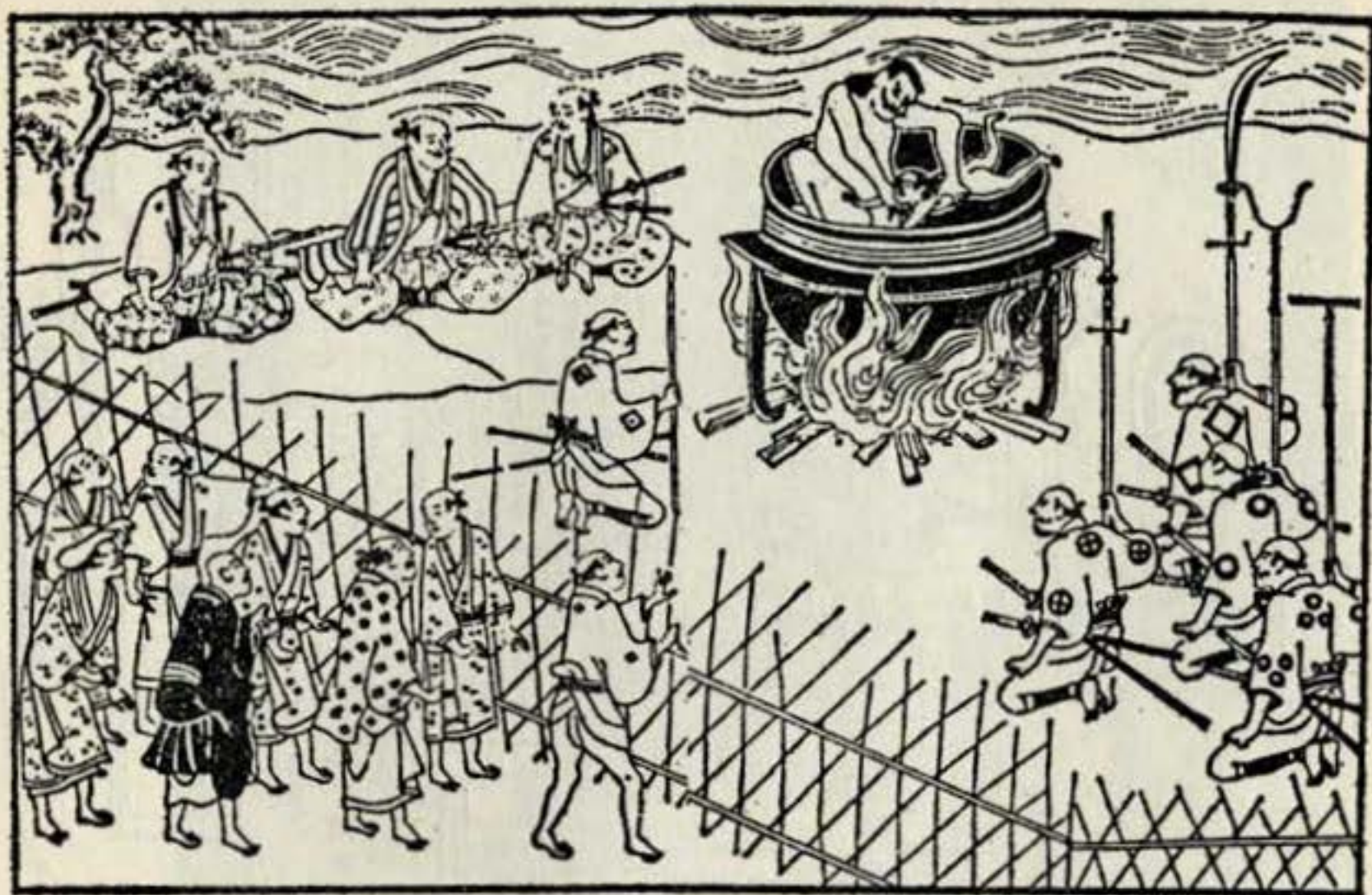
世に盗人の種子は尽くまじ

とうたわれたことが知られている。五右衛門は実在の人



——石川五右衛門（仲村仲藏）

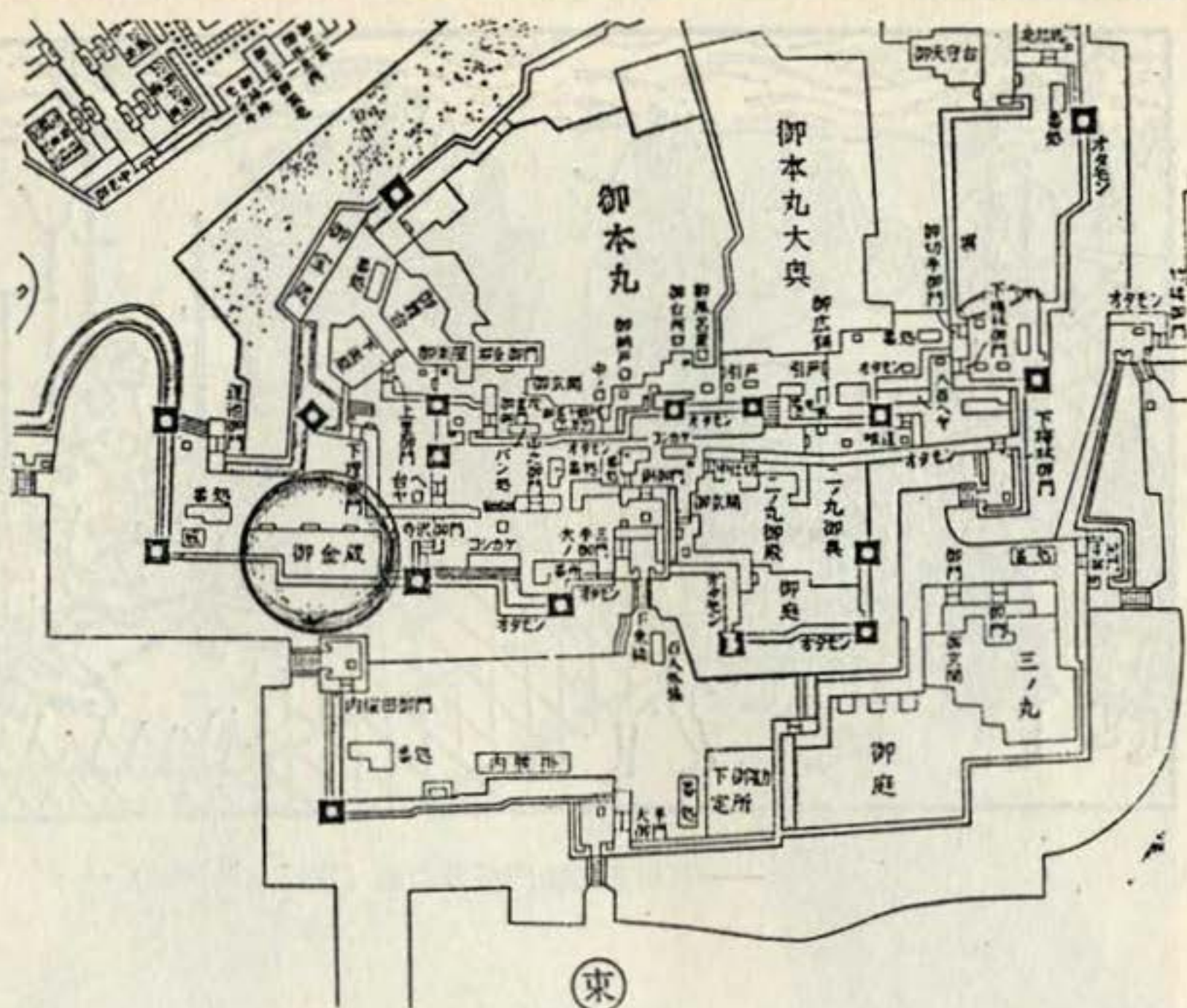
（勝川春好画）——



——石川五右衛門釜煮の図（京都三条河原）——

物であつたが歌舞伎に脚色され「金門（楼門）五三桐」として安永七年（一七七八）大阪において初演された。五右衛門の絶句したとおり、いつの世になつても盗人は絶えることがなく、文学演劇において盗賊を主人公としてもてはやされてきたのである。

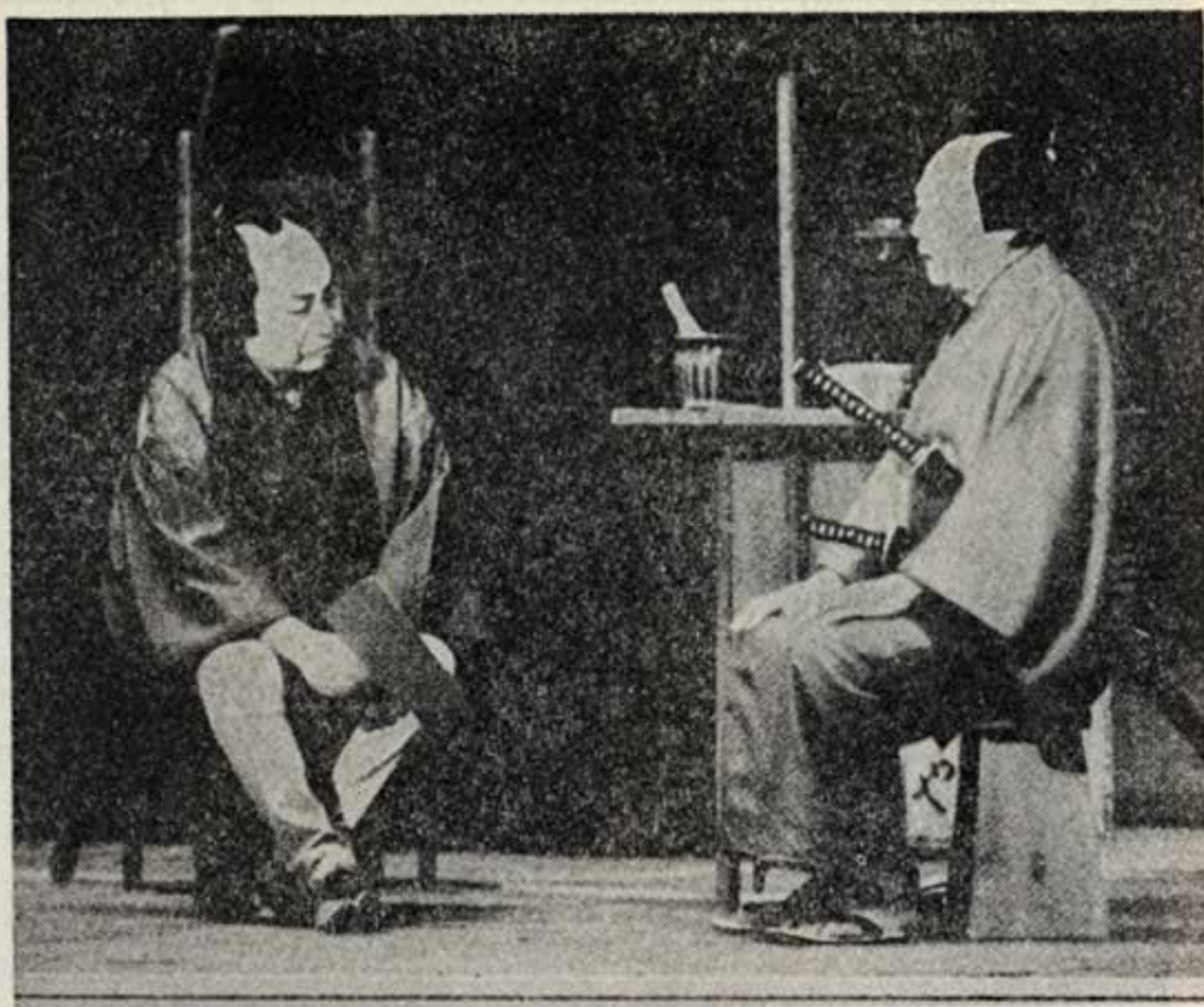
江戸時代末期から明治時代にかけて盗賊を主人公とする白浪物が大流行した。白浪物とは歌舞伎、講談などでは市井の盗賊を主人公とした世話物のことである。中国後漢の末、黄巾の賊が西河の白波谷にこもつて財宝を略奪していたのでこれを白浪賊といつたことから、しらなみと訓じ盗賊のことをいうようになった。黄巾というのは盗賊が頭に黄色の切れをつけていたからである。江戸末期の講談師、二代目伯円が白浪物を得意として大流行、泥棒伯円といわれるほどであつた。河竹黙阿弥がこれに目をつけ、歌舞伎に脚色して大好評を博した。江戸は世界一の人口であるばかりでなく、日本の富の半ばが消費され、豪商が競いあい、一万石以上の大名が二百四十人もいる日本の総城下町である。この大江戸に盗賊がいないとすれば不思議なことである。江戸には名を残す盗賊が数多く出没し、歌舞伎講談に脚色され取材されてきた



—江戸城の金蔵（○印のところ）—

のである。

江戸時代は幕府も大名も商人も当時銀行はないので、それぞれ現金を貯蔵し埋蔵したりしてきたのである。幕府は江戸城内、もっとも安全な場所に金蔵を施設して、金貨を備蓄してきたのである。江戸三百年間にたった一回だけこの警戒厳重をきわめた金蔵に盗賊が入って四千両を盗み出された大事件があった。江戸城内の金蔵は、大手門を入れて汐見坂を上った左の高い石垣のほとり、東は蓮池に面した石垣、本丸の「表」に近いところにあった。この金蔵は四方に柵矢来を回し、金蔵番が昼夜をわかつた見回って警備し、近くには忍者部隊が常駐しており、金蔵の土蔵には鉄筋が縦横に入っていて、外部から近づくことができず、金蔵の中へは入れないのである。ところが安政二年（一八五五）この金蔵から千両箱四個すなわち四千両が盗み出されたのである。一箱でも重い千両箱を江戸城外に持ち出したのであるから、その大胆不敵な行



——四千両小判梅葉

(松緑の富蔵、羽左衛門の藤十郎)——

動に幕府要人は驚愕したのである。柵竹矢来を乗り越えるだけでも容易ではない。金蔵の壁の鉄筋を断ち切るだけでも一晩や二晩ではできない。重い千両箱を運び出すのに一人では不可能である。犯人は複数であることを想定し、幕府は早速、与力同心の特別捜査部隊を編成して捜査を開始した。

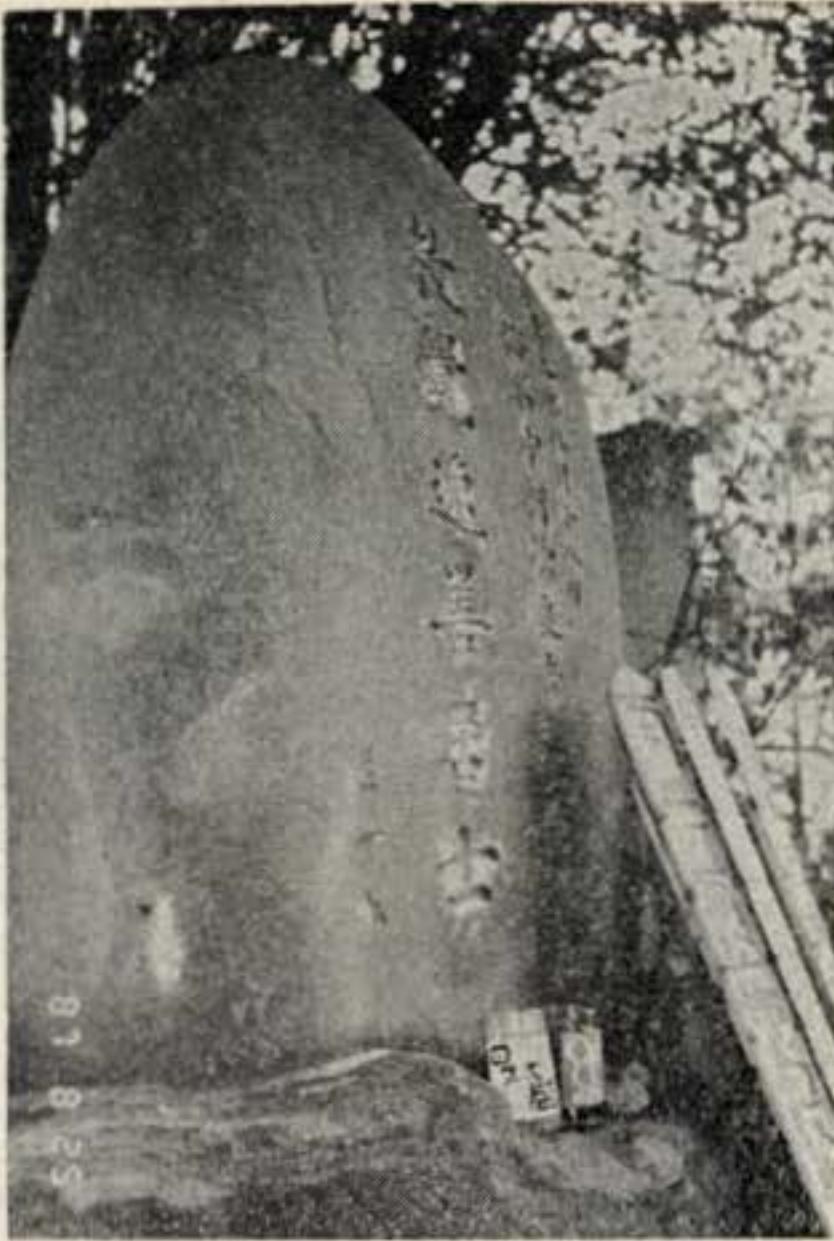
この盗み出しの功妙さは職人であると目をつけ、江戸城工事にたずさわる大工、石工、左官、鳶などの職人百人をしらみつぶしに調査したがその足跡すら不明、だが幕府はその威信にかけても犯人を捜し出さねばならないのだ。江戸城出入りの職人は棟梁がいて鑑札を渡し、顔見知りの者ばかりで、無宿浮浪の徒の入る余地はないのである。捜査はますます困難、たちまち数ヵ月はたち迷宮入りになると思われた。しかしこの千両箱の小判は一分金で吹きたて、すなわち鑄造したばかりの新しい金貨であった。当時の安政一分金は二・二五グラムの金の含有量であった。そこで犯人が金に窮し吹きたての一分金を使い出すのを待って調べるのが残された最後の方法であった。案の定、盗み出されて十ヵ月たったときこの新しい一分金が使用されたのである。下女のような田舎



——十六夜清心

(菊五郎と吉右衛門) ——

風の娘が一分金で小間物屋に買物にきたのである。役人からお触れのあった小間物屋の主人は驚いてそのあとをつけ、居所をつきとめて、幕府役人の同心に密告した。調べるとその娘は奉公先の主人から貰ったという。その主人を調べると大工、上州無宿の**富蔵**であった。かつて大工ということで日本橋下槇町（中央区）の大工、升十郎に入りこみ、江戸城の仕事をすることがあった。そしてその相棒もすぐに逮捕、浪人藤岡藤十郎であった。藤十



——鼠小僧の墓（両国・回向院）——

郎は以前に江戸城の御天守番をしていたことがあった。この二人がどのような入って盗み出したかは定かでない。富蔵がまず柵矢来を越えて数回忍びこみ、要所要所の錠前を写しとり、藤十郎がその合鍵を作って目的を果したともいわれている。この大事件は老中に報告され目付役立合いのもとに町奉行直接取り調べとなり、安政四年（一八五七）五月、小塚原において磔け処刑された。ところがこの大事件は、江戸市民の大評判となり、盗賊の富蔵と藤十郎は英雄視されたのである。

これに気をよくした河竹黙阿弥が安政六年（一八五九）二月、十六夜清心に折り込み「小袖曾我蘇色継」と外題して市村座で初演しようとしたところ、たちまち幕府の上演禁止令が出された。幕府の威信をきずつけるからである。以来江戸時代はこの歌舞伎は上演できなかった。明治時代になってこの事件は日の目を見ることとなり、柳葉亭種彦が絵入朝野新聞に「千代田城噂白浪」という小説を書いてこの大事件を世に公表した。この小説を参考として脚色し河竹黙阿弥は「四千両小判梅葉」として明治十八年十一月、東京千歳座において初演した。富蔵を菊五郎、藤十郎を九蔵が演じ、白浪物流行の波に乗っ



——白浪五人男初演時の勢揃い

(五人男の傘で大入の文字を描いている) ——

てこれが大好評を博したのである。とくにあまり世間に知られていない小伝馬町の牢獄の内部仕来りがリアルに表現され、これに人情をからめた世話物として成功したのである。

江戸の盗賊は数々いるが歌舞伎講談となつて親しまれてきたのが鼠小僧次郎吉である。実在した盗賊であつて、その墓は両国回向院(墨田区)に現存している。現在でも参詣者があとを断たないばかりでなく、その墓石を欠かして持ち帰る人が多いのである。回向院では代墓をいくつも作つてこれを欠かしてもいいことにしている。鼠小僧は寛政九年(一七九七)江戸中村座の木戸番の子として生れ、のち鳶人足となり、賭博にふけるようになった。文政六年(一八二三)以来、武家屋敷のみに押し入り盗みを働らき、徳川御三家をはじめ八十八軒の大名屋敷ばかり盗みを続けた。その回数は百二十二回、盗んだ金額は三千百二十一両であつた。一物も盗みえなかつたのは井伊掃部頭以下十一軒の大名であつた。鼠小僧はついに捕まり天保三年(一八三二)八月十九日、引き回しの上浅草獄門において処刑された。三十七歳。戒名は教覚速善居士。

辞世の歌。

天が下ふるきためしは白浪の

外こそ鼠にあらわれにけり

二代目伯円の講談から河竹黙阿弥が脚色して、安政四年(一八五七)正月、江戸市村座において「鼠小紋東君新形」と打ち出し、これが長い

間、幕藩支配体制に対する反発のためか江戸市民の絶賛を拍したのである。このとき鼠小僧を白浪小団次と異名をとる小団次が演じたのである。

默阿弥作の「白浪五人男」は「青砥稿花虹彩画」別題

「弁天娘女男白浪」といい、その題名のとおり白浪物の

代表歌舞伎である。文久二年（一八六二）市村座において菊五郎が初演し、勢揃いの場面が有名、国貞画の白浪五人男の錦絵に着想した世話物といわれている。「しら浪」と大きく書いた傘をさして五人の盗賊の名科白の啖呵が有名、五人の盗賊の並んだところが庄巻である。五人の



——白浪五人男・日本駄右衛門（羽左衛門）——



——弁天娘女男白浪

(彦三郎と菊五郎) ——

筆頭は石川五右衛門ばりの日本駄右衛門、つづいて弁天小僧、忠信利平、赤星十三、南郷力丸である。日本駄右衛門は実在した盗賊、浜島庄兵衛であり、あとの四人もその部下がモデルである。庄兵衛は全国指名手配されて観念、京都奉行所に自首した。江戸送りとなり、江戸町奉行の裁きを受け、ひつけとうぞくあらためやく火附盗賊改役の徳山五兵衛に引き渡され、引き廻しの上斬首、首は遠州見付(静岡県)にさらされた。二十九歳、延享四年(一七四七)三月十一日のことであった。五兵衛は処刑した庄兵衛の墓を五兵衛の菩提寺である深川の長慶寺に建てた。戒名は大応杏林信士といい、舟形の変った墓であったが、関東大震災後なくなってしまった。貧しい者を救い非道な富有の人を襲ったといわれ、日本駄右衛門から義賊という言葉が使用され出した。

黙阿弥は五人の盗賊、三人の盗賊を並べたて演劇に迫力を持たせたのである。「雲切五人男」は雲切仁左衛門を頭目とした五人の盗賊、頭目は享保十七年(一七三二)十月裁きをうけた実在した人物、あとの四人は架空の人物という。文久元年(一八六一)五月「竜三升高根雲霧」りゅうさんとうみすたかねのくもぎり守田座で初演された。「白浪五人女」は雲切五人男を女

——雲切仁左衛門——



——三人吉三郎初買（豊国画）——

におきかえ、雲切お六を頭目とする女の盗賊である。慶
応元年（一八六五）八月、市村座において「処女評判善悪



——日本駄右衛門の墓のあつた深川・長慶寺——

鏡」として初演され、架空の人物であるが、この芝居に
出てくる神道德次郎は実在の盗賊、明和二年（一七六五）
処刑された。二十八歳。黙阿弥が三人の盗賊をあつかっ
た「三人吉三廓初買」は有名、とくに大川端の部分が独
立して上演されるが、万延元年（一八六〇）市村座で初演
されたもの、三人の盗賊を主人公にしてあるが実在かど
うかは定かでない。鑄かけ松五郎をあつかった「船打込
橋間白浪」も実在かどうかは不明である。しかし文久二
年（一八六二）初演された「勸善懲惡観機関」の村井長庵
は実在の人物、享保二年（一七一七）六月二十八日処刑さ
れている。

そのほか江戸の実在の盗賊として因幡小僧（稲葉）は本
名を新助、武家屋敷と寺院だけに押し入り二十四か所に
盗みをし、捕まって天明五年（一七八五）十月二十二日処
刑された。また葵小僧は自ら駕籠に乗り、部下を従え、
槍を立て挟箱を持たせ、葵の紋の提灯をかざし盗みを働
いた希有の大賊、捕えられて寛政三年（一七九一）五月三
日処刑された。「小袖曾我薊色縫」に出てくる鬼坊主清
吉（鬼薊）は実在の人物、文化二年（一八〇五）六月二十七
日処刑された。三十歳。その墓は雑司ヶ谷霊園（豊島区）

——村井長庵（吉右衛門）——



——鳥衛月白浪
（初代左団次、五世菊五郎、九世団十郎）——

に現存し、墓石の側面に次の辞世の歌が刻まれている。

むさし野に名もはびこりし鬼薊

ときのあつさに今日ぞしほるる

この小さい墓に香煙の絶えたことがない。受験生の合

格祈願が願われるからである。近くにある大きな夏目漱石の墓には供華をあげる人はいないのである。

黙阿弥は白浪作者の第一人者であり、数多くの白浪物しまやどりつきのしらなみの作品を残したが、劇界引退の際「島衛月白浪」を発表

し、新富座で初演されたが、登場人物はすべて白浪であった。實在の盗賊と劇化された盗賊の主要な人物を掲げたが、江戸の盗賊はまだ多くいた。江戸の盗賊の共通点は武家屋敷と豪商宅へ浸入し、江戸の市民から中には英雄視された盗賊もあるほどであった。とくに武家屋敷が多く狙われたのは意外に浸入し易かったからであるという。

鬼薊清吉墓に供華のあり

入学絵馬の用揺る

豊明



——三人吉三(菊五郎)——

(おわり)

四

行

詩

南天の実

小さな庭の日だまりに
黙って実る 真赤なり
わたしも 黙って
日向ぼっこ

清^{きよ}
川^{かわ}
宗^{そう}
治^じ

(詩人)



海と山の狭間で

—九月十三日は無事過ぎたが—

木^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

久し振りに「流言蜚語」の文字を新聞紙上に見たのは、今年の夏のことであった。尤もそれは「流言飛語」となっていたが。この言葉の意は「伝わるのが速い噂。根拠のない噂。デマ」で、戦後はデマに統一された感があつたが、「流言飛語」の復活は、今はやりのレトロ感覚というやつであらうか。

私がこの言葉を知ったのは、国民学校六年生の時であつた。敗戦の噂がどこからともなく聞こえて来て、聞く方は半信半疑だったが、戦後真相が分かって来ると、その大方は正鵠を射たものだったのには驚いた。ミッドウェイ海戦の悲報は、連合艦隊の中核を為して

いた空母の攻撃機隊の主力が、松山基地で訓練していたこともあって、意外に速く届いたし、防諜上、生き残りの隊員は隔離されてそのまま南方の基地に配属されたことまで、正確に伝えられていた。軍部が流言だ蜚語だと躍起になって打ち消そうとしたことは、単なる噂ではなく、事実だったのである。

戦中の流言蜚語の発生源は、信じられないことだが軍部の中枢であった。軍人の口から料亭や花柳界を経て伝わるのが一つのパターンだったが、現在はラジオの深夜放送と週刊誌がその源と見て差し支えないだろう。深夜放送の聴取者は中・高生が殆どで、そんな連中の二人が「ぼくの隣に、必ず話の終わりに……ナーンチャッテとつける変な小父さんがいます」と投書したのがきっかけで、ナーンチャッテ小父さんというキャラクターが生まれた。そしてあちこちに自称ナーンチャッテ小父さんが現れ、その一人が深夜の電車内で女性に悪ふざけして張り倒された時、……ナーンチャッテノと言いながら倒れたというオチ、までついて笑わせたが、やがてこれに飽きると、入れ替わるように口裂け女というのが一時噂の中に出没した。しかしさすがに「私が口裂け女よ」と名乗り出た女性はいなかったようだ。これらはまあご愛嬌と笑って済ませられるが、週刊誌となると影響力は大きく、中・高生の遊びでは済まなくなってくる。

「九月十三日、富士山大爆発!」という記事を出したのは、いつどの週刊誌であったか。雑誌にしてみれば、某女性占師の予言を多分に揶揄的な扱いで載せたのであろうが、テレビやラジオが追隨してこれまた揶揄的な取り上げ方をしているうちに、この占師が以前起

きた福島県沖地震を予知した実績があることから、話はだんだん大爆発説に傾いて行っ
た。

人間誰しも、何事につけても強く否定する心の裏には、必ずと言っていい程「ひょっと
したら……」という一抹の不安を抱いている。ましてや噴火となると、昭和五十二年十
月、何の前触れもなく死火山と思われていた木曾御岳山が噴き、昨年十一月には伊豆大島
の噴火を見ているから尚更である。悪い時には悪いことが重なるもので、八月二十日から
二十七日にかけて予言を裏づけるかのようになり、富士山頂直下一、二キロが震源と思われる
有感地震が発生した。回数は四回と少なかったが、九月十三日爆発説には冷淡だった一般
紙も一斉にそのことを報じ、爆発説は俄然真実味を帯びてきた。ある新聞社が集めたアン
ケートによれば、富士山周辺から避難すると言った人や、周辺部への旅行を見合わすと答
えた人はかなりの高率を示したと言うし、それに関連して東海大地震への不安を訴えた人
も多々あったと記している。そしていたずらに流言飛語に惑わされないようにと記事は結
んであったが、読みようによっては、九月十三日爆発説を肯定する文章ととられても仕方
がない書き方であった。勿論、単なる俗説と一笑に付した地震学者のコメントを併載する
ことは忘れていなかったが……。

そんなことよりも、私が不思議に思ったのは、折に触れて爆発の可能性が指摘されてい
る富士山頂の測候所に、地震計が置かれていなかったことである。この地震の後、気象庁
は慌てて山頂と麓の御殿場に臨時の地震計を設置し、防災センターも二合目に地震計を置

いて観測を始めたが、役所のやることはいつも後手に回ることが多く、今回も直下型の有感地震が起らなければ、また九月十三日爆発説で世間の目が富士山に向いていなければ、恐らく地震計の設置は見送られていたに違いない。東海地震に対する予知態勢が充実しているのに比べて、富士山のそれは全くとられていなかったと言っても過言ではないだろう。僅かに五年前から東京大学の地震研が山麓で常時観測を始めてはいるが、微々たるものである。今にして思えば、数年前気象庁を定年退官したS氏が、富士山爆発説を唱えてその道の学者の顰蹙を買ったことがあったが、氏の発言は気象庁の体質に業を煮やした一種の内部告発であったと同時に、無関心な我々に対する警鐘でもあったのだ。

その後、山頂の地震計は一日平均二回、マグニチュード1以下の微小地震をとらえ続けているそうであるが、人体に感じる大きな有感地震は無く、九月十三日も平穩無事に過ぎたのは幸いであつた。しかし宝永四年（一七〇七）以来約二百八十年近く爆発していないからと言って、決して油断は出来ない。噴火の徴候を見せないからこそ、余計無気味なのである。

火山学の分野では、一級火山の生命は数十万年と推定されている。富士山の隣、南東に位置する箱根山塊はすでに五十万年近く活動しており、山容は侵食を受け、命数は尽きようとしているとか。それに引き換え同じ火山帯に属しながら、富士山が活動を始めたのは約八万年前で、いまなお成長し続けていると考えると差し支えないのだそうだ。富士山は体内にエネルギーを溜め込んで、爆発の機会をうかがっている若い火山なのである。裾野を

長く引く円錐形の火山はその山肌が殆ど侵食されていないことを挙げて、若い証拠としている学者もいる。だとすると、北海道の羊蹄山も鹿児島の開聞岳も同じような姿をしているから、いつ噴いてもおかしくないことになる。私の最も身近にある大室山は標高僅か五百八十一メートルに過ぎないが、山頂に火口を持つ円錐状の山であるから、立派にその資格を備えていると言える。現に火山分布図の中では活火山に分類されていて、目を疑ったことがあったが、伊豆半島の屋根である天城山塊の北東のはずれにポコッと生じた面皰のような姿は、小さいながら典型的な成層火山である。海上からだ、海岸からいきなり立ち上がっているように見えるから、昔は伊東港へ入る船にとっては恰好の目印になったことだろう。

伊豆半島には火山の痕跡は数え切れない程あるが、岩石の組成は富士山や大島・三宅島同様地下のマグマの性質に近い玄武岩であろうと思われる。優しい山容はそのせいかもしれない。玄武岩の火山はサラサラした粘性の低い溶岩を噴く。安山岩を主体にした火山（浅間山・桜島・阿蘇山等）と異なり、エネルギーを蓄えて一気に大爆発し、火山灰をまき散らすという噴火はしにくいとされているが、それでも一旦噴けば、甚大な被害をもたらすのは目に見えている。

東京に住んでいると、東海大地震と言われてもピンと来ず、もし起こっても被害は局地的に東海地方だけにとどまるように錯覚して安閑としているが、たとえ地震の被害は局地的であったとしても、それに連動して起こるであろう富士山の噴火に留意しなければなら

ない。宝永噴火も五十日程前に起きた推定マグニチュード8・4の宝永東海地震が引き金になっているのである。桜島の場合、火山灰が五、十ミリも線路に積もれば信号機が誤動作するので、列車の運行せ見合わせると言う。また一ミリも積もれば路面記号が見えなくなるので、自動車は運転規制する。二センチも積もったら多分通れないだろうとは、日本道路公団加治木管理事務所の見解である。宝永噴火の時、都心部でもその程度の降灰が記録されているから、交通は完全に麻痺するし、下水道は流れ込んだ火山灰と軽石が詰まって、溢れ、低地帯は汚水と泥濘に沈んでしまうだろう。たった五十ミリで信号機が誤作動する位だから、高圧電線や変電所にも当然被害が出る。と、エレクトロニクスの粋を集めた都心の高層ビルは完全にお手上げである。交通麻痺で物資の輸送がままならぬとなると、流言蜚語が飛び交い、都民は旬日を経ずして飢え、東京の街は食糧を求める暴徒に破壊し尽くされ、やがて死の街と化す——とここまで考えて、女房に「そうなれば、狂乱地価もおさまるだろうし、一度神の怒りに触れるのもいいかもしれんな」と言うと、「我が家がどこに建っているか考えて下さいよ、連鎖反応で大室山が噴火しないとは限らないんですからね」と釘をさされてしまった。

思えば私自身、俺だけは安全と高を括っている愚者の一人に過ぎなかったのだ。

（付記。一部朝日新聞の「富士山が噴く時」の記事を参考にしました。）

◎「浄土」表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』十二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、色調を変えて好評な松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけですから、どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、一昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

が、王徐明命終の祈りを静かに見守ってやる理解だけは示してきた。死に直面した相手を安らかに死なせてやろう、という人間根源の善意であろうか。

その善意が、念仏の声を聞いているなかで拡大する。王徐明がやり残した草刈りの仕事だ。これをやり終えたあと、殺しても遅くはあるまい。酷吏はそう分別したにちがいない。

「残った分を刈り取るがよい」

「やらせてくれるのですか」

「仕事は、最後まで続けるものだ」

あるいは、合掌してひたすらに祈る姿へ酷薄な刃を突きとおす気にはなれなかったのかもしれない。草刈りで動きまわる王徐明をバツサリと処刑してしまおう。

だが、そんな刺客の心情の「揺れ」は、王徐明とは無関係だ。いま彼は草刈りの仕事の再開が許されたことへ限りない喜びをおぼえている。

いそいそと草むらを這いまわり、長い草を抜き取り、執拗な根を小刀で掘り起こした。

この雑草を払いのけ、草庵をつくり、善導和上に安らかな念仏を唱えて頂こう。その一念しかなかった。年老いて、健康もすぐれなくなった和上である。日ざしもおだやかな神和原の草原で、遠く終南山や大慈恩寺の塔を眺めやりながら念仏を唱えてもらったら、どんなに有難いことがあるうか。

「わしも手伝おう」

酷吏が王徐明の傍らへ来た。

いよいよ処刑か。坐した身を刺すにしのびず、草刈るままを殺す気なのであろうか。覚悟はした王徐明だったが、やはり硬直感が全身に貼りついた。

だが酷吏は横に並ぶと同じように腰をかがめ、草を刈りはじめた。言葉に偽りはなかった。

勤労もまた信仰同様に連帯、親愛の感情を深めてゆくものである。お互いが処刑、被処

刑の立場を忘れ、厄介な根っ子にぶつかると力を貸し合った。

草にからんだ太い蔓を削ぎ上げた途端、酷吏の短剣が手もとから滑って、数メートル先へはじき飛んだ。すぐ傍らにうずくまっていた王徐明は腰を浮かし、短剣の行方を見定めた。彼の手には小刀がある。

「……」

酷吏は複雑な笑みをきざんだ顔を向けてきた。

「怪我はしませんでしたか」

指でも切ったかと王徐明は手もとを覗きこんだ。

「わしの武器は失われた」

「……」

「その小刀でお前はわしを刺すことが出来る」

「あなたを殺すのですか」

「何を迷っているのか。お前が助かる道はそれしかない」

「そうでしょうか」

「この機会を逃がしたら、わしは間違いなくお前を殺すぞ」

だが王徐明ははっきりと首を振った。

「わたしは殺しません」

「なぜだ」

「出家の身だからです。善導和上に出家することを誓いました」

「出家なら……」

「不殺戒は犯しませぬ」

「殺されてもか」

「早くあの剣を拾って来なさい」

「ふてぶてしい男だ。いくさ人にも見あたらぬ度胸だ」

酷吏は、わざと背中を王徐明にさらし、いつでもかかって来いと隙を丸出しにして、ゆっくりと歩きだした。何ごともなかったように王徐明は草刈りを続行する。

日輪が都の西側を扼する長大な丘陵に没し去るころ、神和原の雑草はあらかた刈り取ら

れた。酷吏は輕装の荷などが置いてある赤土の瘤へ登ってゆき、腰をおろした。そこが処刑台となるのであろうか。

「これに水を汲んで来い」

と太い野牛の角を差し出した。いつも肩から斜めにかけているもので、角の内部の空洞が水筒の役割を果たすのである。

神和原は、すぐ南手に清冽な川が流れていた。王徐明は、川岸へ降りていって、角を水で満たした。

満たしながら遁走するのなら今だ、と一瞬思った。しかし、ひらめいた考えをすぐにもみ消した。

なぜ、みすみす機会を見逃すのか。

明確な答えが返ってきた。あと一歩ではないか。あと一歩近づけば、その酷吏は必ず同信同朋となれるであらう。この機会を逸するほうが罪惡というものだ。

「これを食え」

水の角を受け取ると酷吏は、ナメシ皮の包

みをひろげて王徐明にすすめてきた。

獸肉だった。羊か野牛の肉か定かではないが、細長く刻んだものを塩漬けにし、ニラなどをあしらって何やら正体不明の草の葉で包んである。

砂漠の携行食糧にちがいない。

「坊主は、肉に食わんか」

「そんなことはありません。ただわたしもこれが……一つ、どうですか」

と王徐明は携行した食糧をひらき、差し出した。麦に豆を炊きこんで蜜で固ためた団子であった。

塩漬けの獸肉と、この甘味のある団子とを合わせて食べると、なかなか美味である。

草刈りの労働が旺盛な食慾をかきたてる。

「坊主はなぜ肉を食わんのかなあ」

「それはですね。国中が飢えに苦しんだことがあったのです。食べ物欠乏し、みんなは人肉を食べはじめました」

「人肉？」

「人間の肉ですよ」

「漢人たちがか」

「そうです。貴人もたおやかな女人までが生き血の滴たる仲間の肉に武者ぶりついたということです」

「何と野蛮な……」

「そのとおり。鬼畜の姿です。さすがに仏に仕える僧たちは申し合わせ、どんなに空腹でも、飢え死をしても人間の肉は食うまい、と誓ったということです」

「なるほど」

「精進食の意味がわかっておれば、あえて獣肉を拒ばむ必要はないとされております。仏教の考え方からすれば穀物や野菜、果実にだって生命は宿っております」

「そう言えば大聖釈尊も肉料理を食して、腹をこわし、最後の病いになったということじやな」

「南伝涅槃経」——「大パリニッパーナ経」などに、そんな経緯が明らかにされているの

である。

お互いの腹もくちくなくなったころ、太陽は完全に没して未だ星空にはならなかったが、夜を迎えるただずまいが整った。

「さあて、仕事を始めるか」

酷吏は身を起こした。

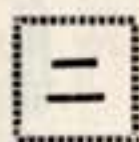
「未だ草刈りですか」

「草刈りは終わったよ。わしの仕事は、お前を処刑することだ」

いっさいの感情を消却した厳肅な声で宣告した。

「そうですか」

王徐明は手首にかけた珠数を握りしめ直した。



酷吏が背後にまわったとき、王徐明は合掌したままの姿勢で訊いた。

「あなたはどんな方法で殺すのですか」

「突き刺そうと思ったが、血の流すのも汚がらわしい。この紐で首を絞めてやる」

腰に巻いた皮製の紐を垂らし、王徐明の頬をなぶった。

「わかりました。ひとつだけお願いがあります」

「何だ」

「それでわたしの首を絞めたあと、ひと声でよろしいから南無阿弥陀仏とお唱え下さい」

「南無阿弥陀仏とは、何か」

「阿弥陀仏に帰命したてまつる、という意味です」

「お前が仏の国へゆけるからか」

「それもあります、唱えることであなた自身も救われるのです」

「余計なことだな。わしは仏なぞに救われる必要はない」

「そういうものではありません。なぜ救われないなどと御自分で決めこんでしまうのです

か」

「悪虐の限りを尽くしてきたからだ」

「どんな悪虐を？」

「わしは忠勤を誓った鸚鵡王を裏切った」

「鸚鵡王とは……」

「遠い砂漠の国の王だ。わしは王の忠良な臣で大部隊を預かっていた。唐の趙元景將軍と吐蕃谿谷で決戦だ。戦闘には勝ったが、敵の囂軍を深追いしすぎた。その隙に本隊は鸚鵡王の城へ攻め入った。守兵は手薄で、たちまち王は捕らえられた。わしが城へ帰ってみたら、城内は唐兵で一杯だ」

酷吏も捕虜となったが、唐の軍司令官趙元景はじかに面接し、唐王朝に忠誠を誓えば死一等を減じてやる、と申し渡した。彼の武略の才を惜しんだのである。

「鸚鵡王の運命はどうなるか、と問うたとき、將軍はお前の返答次第だと言った。つまりお前がわしの言葉を受容すれば、王の生命も保証されるだろうとな。だからわしは趙將

けのものではなく、また発祥地インドのものでもありません。みんなのものです。だからその慈悲はあなたにも恵まれることでしょう」

「わしにも仏の慈悲がだと……ところでお前、さつき草を刈って誰かの家を此処に建てるとか言ってたな。誰の家だ？」

「善導和上ですよ」

「その人も仏に仕えているのか」

「言うまでもありません。わたくし仏の道を詳しく教えて下さった方です」

「お前が殺されようとしても全く恐ろしがないのは、その教えのためか」

「恐ろしくないはずはありません。ただ……」

「ただ。何だ」

「あわてないだけです」

「あわてないだけか」

酷吏は革紐を手もとへ引き寄せると、王徐明の耳もとで、しごくような仕草をした。今

にも首へ掛けてやるぞ、という示威だ。だが王徐明は微動だもしなかった。

「その善導和上とかいう人のところへ連れてゆけ」

「これからですか」

「今すぐにだ」

「仏の道を聴きますか」

「夜になってはいかん。急がねばならない」
処刑のことなぞけろりと忘れてしまった顔で、王徐明をせきたてるのであった。

終南山の山麓へさしかかったころは、すっかり夜の闇に閉ざされていた。王徐明は太枝を折り取ると、その先端に炎を点じた。

「夜の山道には、炎が必要です」

「都育ちの者は不自由だな。わしら蕃地の者は闇でも見えるのだ」

「この炎は足もとを照らし出すだけではありませんよ」

王徐明は優さしく語る。

「ほかに何がある」

「山に棲む獣たちを遠ざけさせます。襲って来ません」

「そんなに獣が恐ろしいか。わしらはいつでも聞つてやる」

「殺すか殺されるか、という世界でしょう。そこに炎——光りがともっていたら、獣たちの方でも近ずいて来ません。殺し合はありません。人間も獣もおだやかに生きられるのです」

「それはそうだ」

「光りですよ。この炎ですよ。これが仏なのです。人間の世界も憎しみ合い、殺し合いがあとを絶ちません。現にあなたがわたしを処刑すると言った。天后の命令でした。天后も人間です。さらに言えば一個の女人にすぎません。あなたとわたしは今日始めて会ったわけです。それが殺し、殺される、という立場へ追いこまれた。処刑の寸前、あなたは刈り残した草を、わたしに手伝ってやってくださいました。誰に頼まれたのでもなく、あなた自

身草を刈る目的も知らなかった。それでもじきに処刑されるわたしという人間に、最後の生き甲斐を果たさせてやろう、と優さしい気持ちになった。これがほんとうの人間です。そのほんとうの姿を、くつきりと映つし出してくれるのが仏陀の光りです」

「……」

酷吏は黙って聴き入っている。さっき王徐明が投げかけた「自分を見つめ直せ」と言った意味が少しづつわかりかけてきたのである。

「いや、わたしのような者がくどくど申上げても意は尽せません。これからじきに善導和上にお会いになる。そうすれば、和上はあなたの心を隅まで洗い清めてくださるようにお話になるでしょう。現在のわたしにとって、生きる灯はあの善導和上以外には考えられないのです」

王徐明は酷吏が持つ松火(たいまつ)をもらい受けると、ゆくての山路の闇を掻き分ける

ようにして、何度も大きく輪をえがいてみせた。

三

善導の衰弱ぶりは、会うごとに深まっていた。それを王徐明は視認しないではおれなかった。それでも横臥はせず、端坐したまま念仏をとえ続けている。

もう冬の訪れが終南山では始まっている。木々の葉は落ち、吹き抜ける風は肌を削らるばかりである。善導が坐る仏堂は吹きさらしの状態で、なぜこんな季節をえらんで善導が終南山に籠もったのか、いぶかしく思われてならない。あの實際寺にいたほうが街なかなので未だしもである。

挨拶がわりにズバリ訊いてみた。善導の答えは、

「格別の理由はありません。冬期には毎年こ

こへ籠もることにしているからです」
「しかし、お身体が以前とは異なっているでしょう」

「阿弥陀さまに仕える身体に以前も現在もなはずです。冬になると、街の人々は家に引っこんでしまう。説法を聞いたり、写経を受けとってもらう人も少くなります。だからわたしはこの季節、しっかりとお念仏をやり直すことにしているのですよ」

北宋の人、王古はその「新修往生伝」のなかで善導の生活ぶりを次のようにまとめている。

導（善導）堂に入れば則ち合掌跏趺、一心に念仏す。力つ（竭）きるに非ざれば休まず、乃至寒冷、またすべからく汗を流すべく、この相状を以て至誠を表す。（中略）三十余年、別に寝処なく、暫しも睡眠せず、洗浴するときを除けば着衣を脱がず。戒品（律）を護

まず老いず、〃現役の念仏者〃として生きぬいた証固だったと言える。

王徐明は簡単に酷吏の身分を告げた。あえて処刑にやってきた事実には触れなかった。

善導も訊こうとはしない。

「どういうめぐりあわせであるか知りませんが、あなたが今宵、此処へ来て下さったことは、仏と御縁が結ばれたのです」

淡々と語りはじめる善導であった。

「縁が結ばれた……」

「そうです。私どもが仏の教えを信ずるか否か、やはりそこには御縁というものがなければなりません。ひとたび結ばれた縁を、より深く強くすることこそ、幸せを掌中にできるのです」

そこで王徐明は言葉をさしはさみ、山路の闇で語った松火の話を言い添えた。

「そうですか。それは良い助言をしてくださいました。闇の道を登ってくる間に、あなたはいっそう仏に深い御縁を結びました。それを親

縁と申します」

善導は親縁の功德について懇切丁寧に語りだした。

「観經疏定善義」のなかで善導は書いている。

衆生、行を起して口にいつも仏の名を称えれば、仏すなわちこれを聞き給う。身つねに仏を礼敬すれば、仏すなわちこれを見給う。心つねに仏を念ずれば、仏すなわちこれを知り給う。衆生仏を憶念すれば、仏もまた衆生を憶念し給う。衆生と仏の三業は相（い）捨離せず。ゆえに親縁と名づく。

「つまりあなたが仏を思えば、仏もまたあなたのことを考えてくれるのです。その容量は、あなたの思う量に比例します。わたしがいま、この仏堂に籠もって、日夜あの阿弥陀像を礼拝し、その御名を称えるのもいっそう

御縁を深くして、その分だけ御慈悲に預かりたいと願っているからですよ」

「あんな木でこしらえた人形が、心などを持つているんですか」

未だ信じこめないと言いたげな表情で、酷吏は堂奥の阿弥陀像へ眼を転じた。

「わたしは眼を光らせて礼拝をします。その眼の光りが、お仏体に吸収され尽して、新しい光りとなってわたしのうへへはじきかえってまいります。そのとき、あのお像はただの木でこしらえた人形ではなくなりますよ」

「拝がむ眼が光りとなる」

「そうです。お仏体が発する光りとなります。それが親縁です……徐明さん」

「はい」

「一緒に礼拝とお念仏をしましょう。あなたは、ただ御覧になっていただけでよろしい。何もおっしゃらずに。きっと判りますよ。わたしの言う意味が理解できますよ」

王徐明は立ち上がると善導の背後へ席を移

した。ふたりは前後に並んで礼拝行をはじめた。若い方士の声は、たしかに衰弱した善導の声を圧倒した。動作もきびきびしていた。

そんな違いはあってもふたりが揃えてくり返す声音な動作は、寒風の吹きこむ堂内に明るさと暖くもりをもたらしした。それこそ「乃至寒冷、亦須流汗」であった。

いつのまにか酷吏も立ち上がり、見様見真似で礼拝を始めていた。その両眼をまぶしげにしているのは、仏像からさし出てくる光りが受けとめることができたからであろう。

堂内は仏陀を讃美する一大コーラス場ともなった感じである。長年の修練であろう。善導の面上には汗の粒が浮かんでいた。

どこから舞いこんできたのか。こんな刻限、眠っているはずの小鳥が二羽、三人の頭上をゆっくりと飛びかいはじめたのである。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
（とめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円
（送料不要）

浄土 五十三巻 十二月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十二年十一月二十五日 印刷
昭和六十二年十二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒103 振替東京八一八二一八七番

待望の新刊

『浄土』誌連載の珠玉の回想記

父と母、そしてふるさとへのはるかな想いをやさしく綴る

『み仏とともに』

——父母に捧ぐ浮生の記——

大正大学学長

安居香山著

B6判 二〇〇頁

定価 一八〇〇円 ㊦二二〇〇円

△発行△ 山喜房仏書林

㊦130 東京都文京区本郷五―二八―四

(振替)東京 〇―一九〇〇

第五十三卷

十二月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十二年十一月二十五日印刷 昭和六十二年十二月一日発行